

壱岐勝本方言のアクセント体系とアクセント単位¹

与那国町教育委員会 中澤 光平

1. はじめに

本発表は、長崎県壱岐島の勝本浦で話されている勝本方言のアクセント体系およびアクセント単位について、発表者の調査データをもとに考察することを目的とする。

2. 壱岐市勝本及び勝本方言について

壱岐島は、九州北方の玄界灘にある島で、九州と対馬の中間に位置する。現在は島全体が壱岐市の1市体制だが、2004年に合併するまでは戦後長らく芦辺町（北東）、石田町（南東）、郷ノ浦町（南西）および勝本町（北西）の4町に分かれていた。

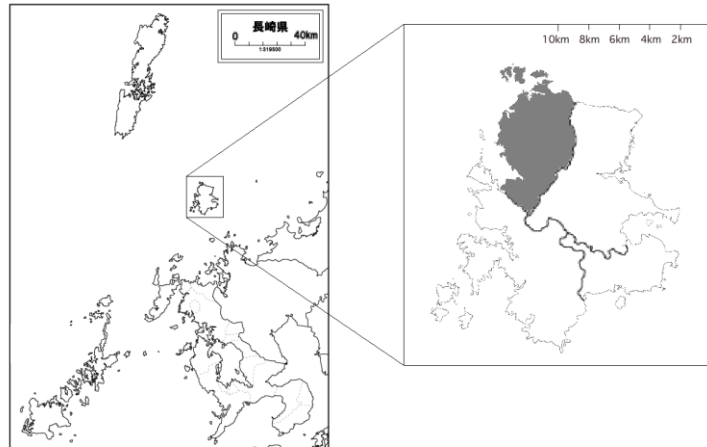


図1 壱岐島および勝本町（灰色部分）の位置

壱岐市は長崎県に属するが、「交通・交易は古くから

福岡との間に栄えている」（岡野信子 1983: 145）ため、壱岐方言はむしろ筑前に近いと考えられる。地元の研究者による鳥巢修（2008）も、「壱岐は、江戸期に平戸藩に属していたが、交通・交易も福岡・佐賀との間が盛んであったため、方言の様々な面で長崎本土と違い旧筑前や旧豊前に似たところがある」（p.10）と述べる。また、壱岐方言内部の地域差について、岡野（1983）は、「地域差がさほど著しくないが、南東部の石田町の方言は概して古風であり、北部の勝本浦の方言には新化が認められる」として、勝本浦（勝本町の漁村集落）の方言に特色があることを述べる。勝本浦を含む勝本町は、特にアクセントの点で他の三町（ただし郷ノ浦北部の沼津は勝本型）と大きく異なることが、先行研究で指摘されている（平山輝男 1951、金田一春彦 1954、岡野 1983）。

3. 先行研究

勝本方言を含む壱岐方言のアクセントに関する先行研究には平山（1951）、金田一（1954）、岡野（1983）、池田史子（2004）などがある。壱岐方言のアクセントに関する先行研究の記述をまとめると次のようになる。

¹ 本研究は国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクト代表者：窪菌晴夫）による「若手研究者のためのアクセント調査旅費」プログラムの支援を受けている。

(1) 平山 (1951) による壱岐方言の名詞アクセント

一音節名詞	中・南部	H-L / H-L (-が ^等 / -の, ん)	例: 柄 ^カ , 蚊 ^コ , 子 ^コ
		H-L / L-L (H-H?) (同上)	例: 絵 ^キ , 木 ^キ , 粉 ^コ
二音節名詞	中・南部	LH / LH-L / LH-H (Ø / -が ^等 / -の, ん)	例: 飴 ^{アメ} , 米 ^{コメ} , 鼻 ^{ハナ} ・花 ^{ハナ}
		HL / LH-L / HL-L (同上)	例: 雨 ^{アメ} , 傘 ^{カサ} , 喉 ^{ノド} , 猫 ^{ネコ}
三音節名詞	中・南部	HLL	例: 鳥 ^{カラス}
		LHL	例: 心 ^{ココロ}
		LHH(-L)	例: 頭 ^{アタマ}
四音節名詞	中・南部	HLLL	例: あくる日, くちばし
		LHLL	例: あかぎれ, かまぼこ
		LHHL	例: 鉢巻き, 雨傘
		LHHH(-L)	例: 薙刀, 小刀

H: 高い拍。L: 低い拍。以下同様。

母音の無声化は省略した。平山 (1951) の北部は勝本型を, 中・南部はそれ以外の型を表す。これを見ると, 一音節名詞 (1 拍語) には 2 つの型 (一部で中和), 二音節名詞 (2 拍語) には 2 つの型 (一部で中和), 三音節名詞 (3 拍語) には 3 つの型, 四音節名詞 (4 拍語) には 4 つの型があると認めているようである。北部と中・南部との違いは 2 拍語の類別語彙の統合の仕方にあると述べている (類別語彙の統合については後述)。

(2) 金田一 (1954) による壱岐方言の名詞アクセント

壱岐主流方言	LH ~ LH-L (-が)	例: 風, 牛, 音, 石
	LH ~ LH-H / LH-L (-の / -が)	例: 皮, 足
	HL ~ HL-L (-が)	例: 海, 箸, 秋, 猿
壱岐西北部方言	HL ~ HL-L (-が)	例: 風, 牛, 音, 石
	HH ~ HH-H / HH-L (-の / -が)	例: 皮, 足
	HL ~ HL-L (-が)	例: 海, 箸, 秋, 猿

金田一 (1954) は 2 拍語のみの考察に限るが, 壱岐主流方言に 3 つの型を認め, 西北部方言 (勝本型に相当) に 2 つの型を認めている。

(3) 岡野 (1983) による壱岐方言の名詞アクセント

一音節名詞	H-L	二音節名詞	LH, HL	三音節名詞	LHH, LHL, HLL
-------	-----	-------	--------	-------	---------------

岡野 (1983) は, 各型の所属語彙こそ違うが, 石田町も勝本浦も同じ体系と述べている。

(4) 池田 (2004) による壱岐勝本方言の名詞アクセント

- 1 拍名詞 H / H-L(...) / H-H(...) (L-H(...))?
 - 2 拍名詞 HL / HL-L(...) / HL-L(...) 4 拍名詞 HLLL / HLLL-L(...) / HLLL-L(...)
LH / LH-L(...) / LH-H(...) LHLL / LHLL-L(...) / LHLL-L(...)
 - 3 拍名詞 LHL / LHL-L(...) / LHL-L(...) LHHH / LHHH-L(...) / LHHH-H(...)
HLL / HLL-L(...) / HLL-L(...) 5 拍名詞 LHHLL / LHHLL-L(...) / LHHLL-L(...)
LHH / LHH-L(...) / LHH-H(...) LHHHH / LHHHH-L(...) / LHHHH-H(...)
- (\emptyset / -が, で, に, から, より等 / -ん, だけ, ばかり等)

池田 (2004) は本発表と同じく勝本方言に限定した上で、5 拍語までの名詞アクセントについて記述している。池田 (2004) によれば、名詞の大部分はアクセントの下がり目が後ろから 1 拍目にあるグループと (−①と表記)、アクセントの下がり目が後ろから 3 拍目にあるグループと (−③と表記) に分けることができる (1 拍語は 1 つの型のみ)。また、「が」のように常に低く接続する助詞 (「助詞 A グループ」) と「ん」 (「の」の転) のように直前の拍と同じ高さに接続する助詞 (「助詞 B グループ」) がある。

いずれの先行研究も類別語彙²と類の統合について言及している。

表 1 先行研究による壱岐勝本方言の類の統合

	1 拍名詞	2 拍名詞	3 拍名詞
平山 (1951)	1・2・3? (中・南部)	1・2・4・5/3	
金田一 (1954)		1・2・4・5/3	
岡野 (1983)	1・2・3?	1・2・4・5/3	1・6・7/3/4?
池田 (2004)	1・2・3 (<*1・2/3)	1・2・4・5/3	1・2・3・5・6・7/4

x・y: x と y が統合している。x/y: x と y が区別される。斜線: 先行研究で言及無し。

先行研究で一致しているのは、2 拍名詞の類の統合を「1・2・4・5/3」と考えることである。池田 (2004) によれば、勝本方言はあたかも「二型アクセント」の様相を呈する。3 拍語の LHL は「単衣」の 1 語のみで、しかも HLL とで「揺れているように感じられる」という。4 拍語には HLLL が 8 語あるが、LHLL の 56 語、LHHH の 39 語と比べると少数と言える。

一方、岡野 (1983) は勝本方言にも LHL を 17 語認めている。HLL の 43 語および LHH の 36 語と比べれば少数であるものの、決して無視できない数である。平山 (1951) は 3 拍語について、中・南部との違いには言及していない。

² 過去の文献、ならびに現代諸方言の考察から、古い日本語において同じアクセントを持っていたと推定される語彙をグループにまとめたもの。金田一 (1974) では、名詞について以下の類を立てる (p.62-73)。1 拍名詞: 1 類~3 類, 2 拍名詞: 1 類~第 5 類, 3 拍名詞: 「形」類 (1 類), 「小豆」類 (2 類), 「頭」類 (4 類), 「命」類 (5 類), 「兎」類 (6 類), 「兜」類 (7 類)。金田一 (1974) では立てられていないが、「力, 二十歳, …」などを「二十歳」類 (3 類) として認める場合もある。

4. 勝本方言のアクセント体系

LHL の違いのように、先行研究で一致しない部分は、あるいは歴史的な変化を示しているのかもしれない。このような点を明らかにするため、発表者は壱岐での現地調査を行った。本発表では発表者の調査データをもとに勝本方言のアクセント体系について記述する。

4. 1 調査概要

調査は2013年9月と2017年1月に実施した。2013年の調査は単独形での調査が中心で、2017年の調査は主に助詞付きの形での調査を行った。話者は2013年と2017年で異なる。調査方法は発表者が作成した調査票を読み上げていただく形で行った。各話者とも調査時間は1時間～2時間程度である。

4. 2 名詞のアクセント体系

下に、発表者による壱岐勝本方言の名詞アクセントの調査結果を示した。

表2 壱岐勝本方言の名詞のアクセント体系

型 \ 拍数	1 拍語	2 拍語	3 拍語	4 拍語
1 型	H, H-L	HL, HL-L	HLL, HLL-L	(HLLL, HLLL-L)
2 型		LH, LH-L / LH-H	(LHL, LHL-L)	LHLL, LHLL-L
3 型			LHH, LHH-L / LHH-H	(LHHL, LHHL-L)
4 型				LHHH, LHHH-L

(‘.’の後は1拍助詞「-が / -の」の音調)

n型はn拍(nモーラ)目の後に下がり目がある(=n拍目に下げ核がある)ことを示す。ただし①型では、池田(2004)の助詞Bグループが後続する場合下がり目が消える。

()に示した型は、少数の上に個人差があり、また個人の中でも安定しているものは少ない。

- (5) a. LHL で出た語 欠伸(アキ^ˆ)、砂糖(サト⁻)、二重(フヂ^ˆ)、双子(フタゴ^ˆ)、二つ(フツ)
- b. HLLL で出た語 居眠り(イネリ)、猪(イジシ)、金槌(カズチ)、楠(クスノキ)、嘴(クチバシ)、座布団(ザブトン)、魂(タマシ⁻)、手袋(テブクロ)、友達(トモダチ)、鶏(ニトリ)、三日月(ミカズキ)
- c. LHHL で出た語 此間(コノイダ^ˆ)、筍(タケノコ)、物陰(モノカゲ^ˆ)

HLLL はある程度の語数が見られるが、LHL と LHHL はほとんど確認できなかった。

このように、壱岐勝本方言のアクセントは、類別体系や共時的アクセント型の偏りから、名詞に関して概ね2つの型の区別(①と③)しかないように見えるが、調査語数を増やすと①と③に収まらない語が出てくることから、核の位置が弁別的な体系と位置付

けられる。ただし無核型を欠くため、1拍語に1種類、2拍語に2種類、3拍語に3種類、…と、n拍語にn種類のアクセント型があることになる。

4. 3 不定語を含む文のアクセント

壱岐勝本方言のアクセント体系は、付属語を含む文節がそのアクセント単位となり、名詞の核の位置と助詞の種類でアクセント型が決まることが分かった。一方で、一部の環境ではこの原則から外れることが、今回の調査で明らかになった。例外的なアクセント型が観察される環境の一つとして、「何、誰」などの疑問詞が不定語となる場合、不定語を含む文節全体が、後続する助詞が助詞 B グループでなくとも下がり目を失う。

- (6) ナニ LH (何), ナニガ アル LHL HL (何がある), ナンバ タベチモ ヨカヨ LHH HHHL HLL(↑) (何を食べても良いよ) ※(↑)は上昇調イントネーションを表す。以下同じ。

「バ」は「ガ」と同様に助詞 A グループなので通常は低く付く(例: イヌバ LHL (犬を))が、(6)ではナンバ LHH という予想 (LHL) と異なる音調を取る。

疑問詞が助詞「モ」を伴い不定詞と解釈されるとき、「モ」が疑問詞を含む文節に含まれる場合は、「モ」の直前に下がり目が来る。「モ」が疑問詞を含む文節に含まれない場合は、疑問詞を含む文節が平板化する。

- (7) イツ LH (何時), イツマデモ アル LHHHL HL (何時までもある), イツマデ タッチモ オワラン LHHH HHHL HLLL (何時まで経っても終わらない) cf. ナミマデ LHLL (波まで)

また、「モ」が疑問詞とは別の文節にある場合、「モ」の直前まで平板化することがある。

- (8) ナンバ コーチモ ヨカヨ LHH HHHL HLL(↑) (何を買っても良いよ) cf. コーチ HLL

5. 考察

名詞のアクセント調査から、勝本方言は非常に偏りがあるものの、核の位置が弁別的な体系と解釈されることを示した。ただし無核型を欠き、助詞 B グループが後続する場合に限り、-①型は下がり目が消える。しかし、不定語を含む文では、助詞 A グループでもナンバ LHH (何を) のように下がり目が消え、無核型を認める必要があるように思われる。

この現象については、例外的に無核型を認めるのではなく、この場合も「モ」の直前に下がり目が生じることから、疑問詞から「モ」の直前まで ([疑問詞…]_モ) が、あたかも一語として扱われるものと解釈したい。(9)では[ナンバ コーチ]までを-①型の語と見なす。

- (9) [ナンバ コーチ]モ ヨカヨ LHH HHHL HLL(↑) (何を買っても良いよ)

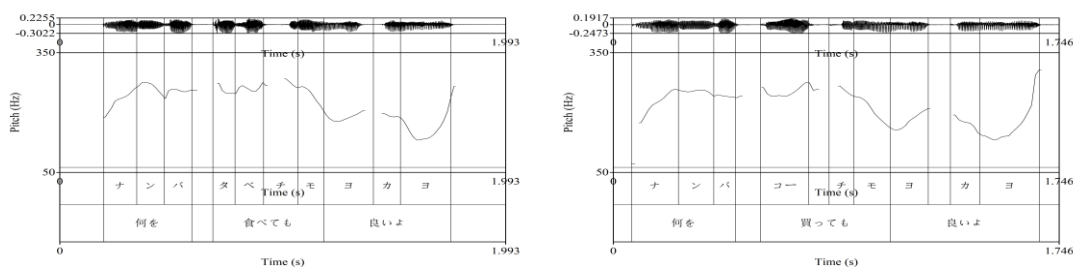


図2 「ナンバチモヨカヨ/ナンバコーチモヨカヨ」のアクセント

このような単位を認めることはアドホックにも思われるが、佐藤久美子 (2016) によれば、長崎市方言でも同様の環境において、不定語（疑問詞）から「モ」の直前までが「音韻的な語となる」と分析している。ただし、佐藤 (2016) ではこの「音韻的な語」と「モ」が複合語となるとしているが、壱岐勝本方言では「モ」は助詞 A グループの一般的な振舞いを示すものと解釈される。ただし、(10)のような例は一語化の解釈ができず、課題として残る。

(10) ダレガ イチバデ リンゴバ コーチモ ヨカヨ LHH LHHL HLLL HHHL HLH(↑) (誰が市場でリンゴを買っても良いよ) (イチバデ, リンゴバが元のまま, ダレガだけ平板化)

6. まとめと課題

壱岐勝本方言のアクセントは、長崎市方言にも想定されるような「音韻的な語」を認めることで、無核型の欠けた核の位置が弁別的な体系と解釈できるが、それだけでは説明できない例も残った。また、本発表では扱わなかったが、旧勝本町でも湯本地区など勝本浦以外では LHL などがある程度見られた。近隣方言の調査により、名詞アクセントの著しい偏りが歴史的に生じたことを明らかにできる可能性がある。

謝辞

話者の皆様および話者をご紹介くださった鳥巢修様にお礼申し上げます。

参考文献

- 池田史子 (2004) 「壱岐勝本方言の複合名詞アクセント：後部要素が1拍名詞の場合の複合規則仮説」『山口県立大学国際文化学部紀要』10: 21-27.
- 岡野信子 (1983) 「壱岐・対馬の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』: 143-171.
- 金田一春彦 (1954) 「対馬附壱岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか」九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』: 347-373.
- (1974) 『国語アクセントの史的研究』pp.318, 東京, 塙書房.
- (2005) 『金田一春彦著作集 第七巻』pp.754, 町田, 玉川大学出版部.
- 佐藤久美子 (2016) 「長崎市方言における複合法則の適用について」『対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法』研究発表会, 発表資料.
- 鳥巢修 (2008) 『きーちみ しゃべっちみ—壱岐島の方言事例集—』: 長崎.
- 平山輝男 (1951) 「壱岐対馬両方言の音調に就いて」『音声の研究』7: 213-228.